

早期水稻の苗播きについて

向野一一, 平塚忠士
(大分県農業試験場, 宇佐分場)

MUKUNO, K. and HIRATUKA, T.
On the Sow Seedling of the Early-sowing Cultivation System

早期水稻育苗については、従来箱育苗折衷苗床仮植を行ってきたが、当分場で昨年及び一昨年に仮植操作を止め無仮植挿秧を検討してみた。その結果、生育収量について好結果が得られ、仮植育苗の労力、資材の節減等に期待がもたれた。しかし挿秧において稚苗でしかも貧弱気味な苗であるため不便であり手間どつた。そこで本年挿秧をしなくて、そのままの形でおくつまり苗まきを検討してみようとしたものである。

試験方法

1. 供試品種 越路早生
2. 試験区の構成
3. 苗播き又は挿秧期 5月17日
4. 施肥量 (kg/a)

No.	育苗法	1株本数	栽植距離	m ² 株数	播種期
1	無仮植育苗	裁断苗	28×10	35.7	5. 2
2	"	"	28×12	29.8	5. 2
3	"	"	28×14	25.5	5. 2
4	"	3本	28×10	35.7	5. 2
5	畑苗	3本	28×12	29.8	3. 26

堆肥115, 硫酸3, 過石4, 塩加1.2 (追肥), 硫酸0.4, 塩加0.2 (6.10), 苗まきについては、育苗箱のビニールシートを素早く抜きとり、苗の箱の片側に集めた後ナイフを使用し横10等分し、一つの苗群を長さ2.5cmの短冊裁断苗とした。苗は2葉期であった。本圃では、代掻き落水後型付け器で既定の距離に型付けし、その上に手先きで苗を並べ苗播きとした。標準畑苗については草丈13cm 茎数1.5本葉令4.5葉であった。

試験経過の概要

苗播き後は、極浅水にし苗立ちに努めたが約10日にして大体揃った感じであった。苗立ち後の生育は前年と同様で初期は見おとりしたが、6月中旬になつて旺

盛な生育をとげ畑苗と大差ない草状となつた。主な管理については、6月10日追肥と共に雑草が発生したため手取り除草後PCP処理をした。

後期は生育順調であつたが、9月9日の台風9号通過のため倒伏をみた。これにより稔実阻害と若干の穂発芽のため草出来の割に低収因となつた。

試験結果

区名	6月25日		成熟期			有効歩合
	草丈	茎数	稈長	穂長	穂数	
28×10 苗まき	75.9	23.3	91.4	18.3	13.0	55.8
28×12 苗まき	75.6	22.4	91.5	18.4	14.4	62.5
28×14 苗まき	76.0	23.9	93.8	18.4	15.0	62.8
38×10 3本苗まき	76.2	20.1	91.0	18.8	12.7	63.2
23×12 畑苗	78.2	19.7	92.8	19.4	13.1	66.5

区名	a 当				対玄米標準比率
	稲稈重	精粗重	玄米重	籾米重	
28×10 苗まき	73.1	45.5	32.8	4.2	89
28×12 苗まき	74.3	47.5	33.9	3.5	92
28×14 苗まき	80.8	50.4	36.7	3.5	100
28×10 3本苗まき	71.6	49.2	36.3	2.5	99
28×12 畑苗	78.3	49.2	36.8	2.1	100

区名	1 / 重		玄米	籾摺歩合	品質
	玄米	精粗			
28×10 苗まき	760	528	18.4	72.1	中上
28×12 苗まき	770	526	18.4	71.4	中上
28×14 苗まき	760	531	18.6	72.8	中上
28×10 3本苗まき	770	545	19.0	73.9	中上
28×12 畑苗	765	540	18.6	74.8	上下

乳熟期倒伏のため、玄米千粒重、籾摺歩合とも悪く概して苗まきは品質も悪かつた。収量について苗播き区は畑苗に及ばなかつたし、苗播き密植は増収にならなかつた。

苗播きの経済性について

無仮植裁断苗は、1箱当り約1,000個出来るので育苗の簡便と短期育苗の利点があり水苗代の1/10程度で庭先き管理が出来る。